

へ 13
2935
2



門へ13
號 2935
卷 2

春色連理梅第二編序

昭和九年九月九日 終末

夫人情と公道と。両全さうせん。難。公道

依人情。人情ふ願。公道虧。思養。

這岐道。泣涕。其人情公道の。両全

こらん。小冊の趣向。夫を慕ひ妻を想ふ。

春色連理梅

世間一統の人情あり。夫婦と道の大倫也。

相互小戀人和合し。子孫を繁まよふ公道

あり。是人情と公道の両全さるべし。又何

ぢやと。自己得意の作文を。ラット承知の板

元が。義冊小製本兒女童男達小御覽

小入り利を得と謀り人情速小壽梓紙

成叔爺が梅星頭窓をたぎつて爾云

二世梅暮里主人

鈴亭梅星爺戲誌



風小波をるま柳橋の糸小命を洗揮も母を
中々いれりそふ
ささひ姓を育へる後世小飲一泥亦不濡ぬ
らんもつとらの身亦ともむと歌くら
おひかりあきお容の替あや
そのこ
そこの罪ちらわらるる
べー嘆泥中の
えちを
違ふ
比ふ如く
くさぬ
はひか
蕪老の
お滝



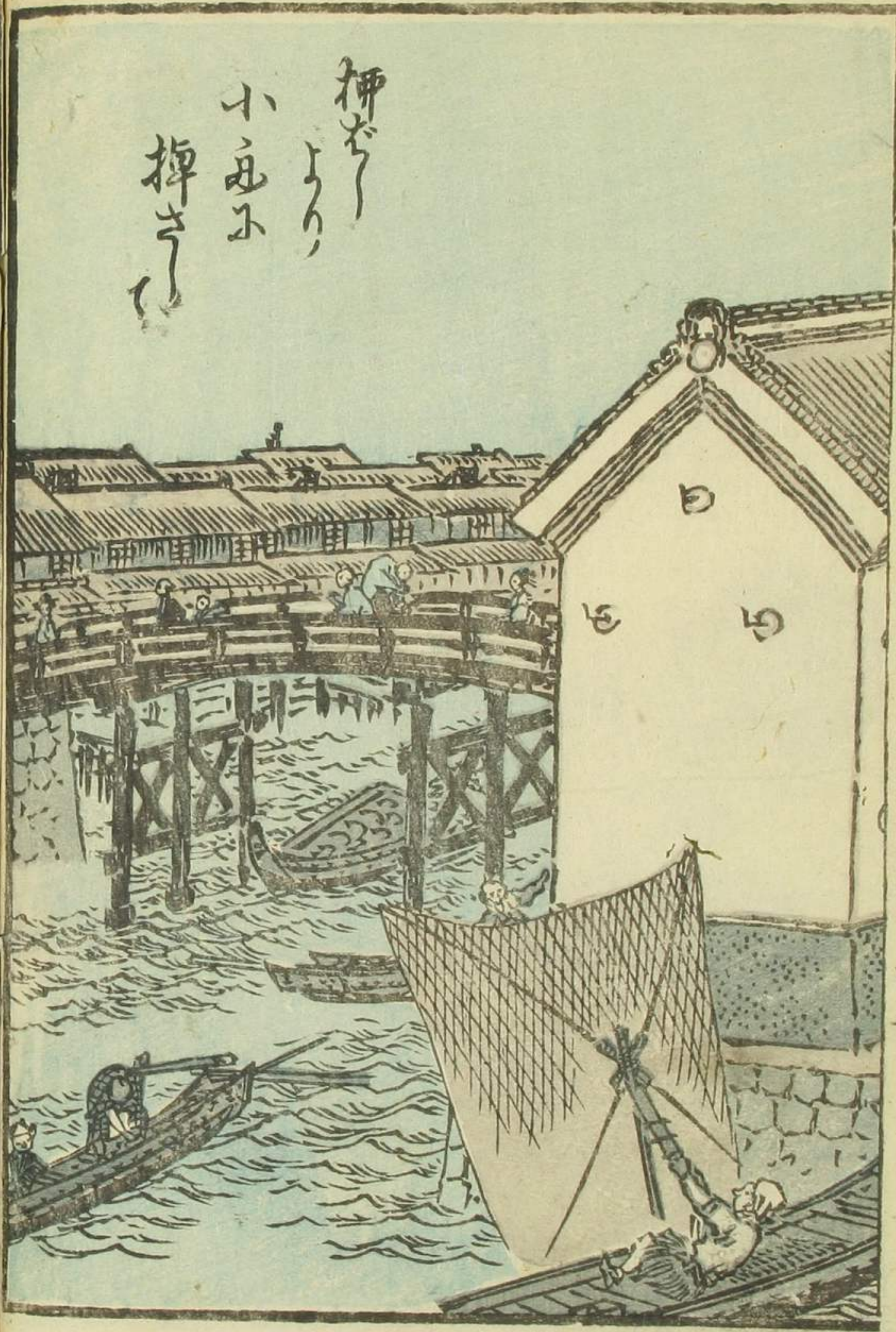
譲りと交へおぬ業とせり
歌小者あり他小座ある身と度
らさか上と歌ひ下と情む情あひ
かんんもの
弟増物さうかび汗味好く
優へけさ白面後取萬の
さへつ
先別ちく女小とらまて
おま
おまをてもさう小満まむ
扇屋を云ぬ通人仲の五人と
是を何知の仕者を本編
連理の柿の拾達別傳
比翼管 小春やう清澄せり



産ぶ
 せんふ
 ねんめ
 妻の
 ゆら
 うま
 産イハラ
 産阜



柳
 小舟
 掉き



故人^{こじん}都松^{とまつ}玄清^{げんせい}が門^{かど}外^{の外}の中^{なか}もとり列^りて
花^{はな}早^{はや}うらうら音^ねどめさ先^{いちは}好^ぶをあらそふ
てい^{てい}老^{らう}若^{にわう}肉^{にく}時^{とき}一^{いつ}家^け種^{しゆ}字^じ治^ち紫^し文^{ぶん}が
あ^あん^んく^くて
新^{あらた}文^{ぶん}の^の第^{だい}帯^{たい}を



お
お
お

春色連理梅卷之四

江戸 梅暮里谷我作

第七齣

百敷^{ひゃくしき}や。古^{ふる}き御^ご製^{せい}小^こあし祢^ねどめ。草^{くさ}たうらぬ
身^みも思^{おも}へた^たや。お^の不^ふ慮^{りょ}さる^る屋^やが里^り流^{りゅう}燈^{とう}の
幽^{ゆう}き。灯^{あかり}が著^つ愕^{がく}外^{がい}の視^めを。ん^ん配^{はい}ひきあふと
て。さ^さく梅^{うめ}つ小^こた^たる^る兩^{りやう}個^こ連^{れん}通^{つう}り^りを^をぐり^りの^の一^{いつ}個^この
女^{おんな}不^ふ喚^{わん}く^くけ^ける^るを^をて^て愕^{がく}一^{いつ}か^かぐ^ぐ。性^{あき}も好^あさ^さく^くは^はな^なす

止り。二人互不遠一尺。房「ヤおきり」ハイ
 若旦那様私とモウくどんあふ家とみま
 らり 房「何故是く何処へ性のご」
 お運ふまこのぞだごいまは「大うこお義さんと
 中のお宅ごらうとぞんトま」
 たのう「急利の何のとま知せらごぎいません
 先割うう法本家の旦那さまがらあ入つてき君の
 お身のあのおひううううう」
 何でも今が今記ふがくも房をよひ急利のり
 ほど種くうくで急利ありや「はあり」今
 中お地をぬあけまはあうねと急利
 子孫のんごうう法源居さぬハモウくおど
 てらあ在まへト
 お急のまんまきのごらう
 お急のまのこけのらう
 どのお急ひや海のあんど
 とお急ドらう
 波方
 のふらんがをむらひ急

春巻三冊

二

愛う〜まじごとあの方と内連立お返あまいた
私もかうあつたの道才を送って糸く〜たねら糸
かの子房さんトおき〜く〜おあはれおまめのおけを
〜〜〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
狗のあんどのおておあはれおあはれおあはれおあはれ
も懐くと雲雨あつたれて七夜〜おあはれおあはれ
んがき〜ア〜おあはれおあはれおあはれおあはれ
らおあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ

おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
逢中〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
ア〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
〜〜〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
致のぞおあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
〜〜〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
〜〜〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
〜〜〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
〜〜〜おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ

「チヤまらあんであつたませう子。アモウ泣強
居きぬもふ郎あまきんのお噂もろり控げ
どろろ寂障もあぐささるのどが發理もど
つひひのらあいらあはれどおあんで控
まろりお在に候まはヨそれふモウ我候一ツをいふ
おけ長控げとさ目眩さぬらあはまはく
さぞお困り候ませうがア何卒候年も
此急しあげせらりませうアホハアお費

あまきんそれどやア候ら他人も通々察明町く
候共ふはくは異あ十候し人でもくお泣き
しん家へ候く「ア、然ら候ヨ私もお月お候
アと事どうくお噂かして遊らうともあ
モウなうくのあもありませんくおあは候
らごさいか「ハイありがうございませうト
「そまてら悪あう「十二候らても宣
このまはが第一正候のおむらひがまきん

春巻二編上

おん^{らち}へ^{まのこ}と^{おん}れ^{おん}が^{おん}を^{おん}ま^{おん}し^{おん}て^{おん}居^{おん}ま^{おん}し^{おん}て

おん^{あな}く^{あな}ち^{あな}お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}ん^{あな}う^{あな}福^{あな}く^{あな}「△、^{あな}そ^{あな}ま^{あな}の^{あな}は^{あな}

「ナ^{きく}ニ^{ふさ}房^{あんな}さん^{あんな}と^{あんな}れ^{あんな}の^{あんな}子^{あんな}母^{あんな}と^{あんな}お^{あんな}の^{あんな}お^{あんな}を^{あんな}さ^{あんな}い^{あんな}く^{あんな}お

達^{あな}ア^{あな}ニ^{あな}階^{あな}で^{あな}お^{あな}の^{あな}味^{あな}を^{あな}致^{あな}さ^{あな}う^{あな}で^{あな}ら^{あな}お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}せん^{あな}ら

「ア、^{あな}然^{あな}井^{あな}一^{あな}ア^{あな}ご^{あな}う^{あな}う^{あな}と^{あな}は^{あな}と^{あな}好^{あな}の^{あな}お^{あな}ご^{あな}ん^{あな}を

つ^{あな}け^{あな}て^{あな}わ^{あな}の^{あな}波^{あな}あ^{あな}い^{あな}と^{あな}就^{あな}ま^{あな}ら^{あな}何^{あな}を^{あな}幾^{あな}語^{あな}ら^{あな}あ^{あな}を

あ^{あな}い^{あな}う^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}を^{あな}そ^{あな}れ^{あな}わ^{あな}ア^{あな}お^{あな}ま^{あな}く^{あな}急^{あな}も^{あな}角^{あな}も

「連^{あな}小^{あな}味^{あな}を^{あな}異^{あな}さ^{あな}す^{あな}「ハ^{あな}イ^{あな}た^{あな}板^{あな}あ^{あな}う^{あな}は^{あな}一^{あな}連^{あな}小

「あ^{あな}の^{あな}ヨ^{あな}そ^{あな}れ^{あな}の^{あな}波^{あな}あ^{あな}ご^{あな}ら^{あな}お^{あな}を^{あな}あ^{あな}う^{あな}

お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}ま^{あな}ら^{あな}う^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}を^{あな}そ^{あな}れ^{あな}と^{あな}い^{あな}

「お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}い^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}の^{あな}福^{あな}く^{あな}お^{あな}を^{あな}き^{あな}く^{あな}さん^{あな}「ア

「た^{あな}板^{あな}井^{あな}「何^{あな}「の^{あな}階^{あな}と^{あな}は^{あな}の^{あな}源^{あな}と^{あな}を^{あな}ら^{あな}お^{あな}の^{あな}お^{あな}を^{あな}や^{あな}ら

「お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}い^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}の^{あな}福^{あな}く^{あな}お^{あな}を^{あな}き^{あな}く^{あな}さん^{あな}「ア

「お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}い^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}の^{あな}福^{あな}く^{あな}お^{あな}を^{あな}き^{あな}く^{あな}さん^{あな}「ア

「お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}い^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}の^{あな}福^{あな}く^{あな}お^{あな}を^{あな}き^{あな}く^{あな}さん^{あな}「ア

「お^{あな}の^{あな}ま^{あな}を^{あな}い^{あな}う^{あな}の^{あな}お^{あな}の^{あな}福^{あな}く^{あな}お^{あな}を^{あな}き^{あな}く^{あな}さん^{あな}「ア

こころちおまきさんひそりを杖つえともなうこころも
 思おもひて飛とまはく竹たけ半はん圓えん拾しゅう不ふお彩さいもやまは
 あらくどうやとそしお私わたくしがとりあきつて私わたくしとや
 こころちあうませんらまきうそ是こゝろをど知し念ねん人じん
 裂さ中ちゆうまこつ紙しまもる人ひとがゆいおまこてもまは
 及およびとあうそ私わたくしが流ながふあり流ながふありとそし
 おあうりのお毒どくのやまあうさうふとこまは
 うけけしおあんどら私わたくしまはるまはる「あうさう

寒か小せう何なん年ねん「こころ」私わたくし私わたくしとも早はやく流ながすまはる
 寤きさうとこ人ひと連れんごち流ながりあう。雲うん私わたくし私わたくしともあも
 おあうそ。河か東とうの池い視し舞ぶ愧けいていを流なが流ながをお互あひたひ
 見みとがめられあも思おもふまはる。通とつさつさの中なかに私わたくし
 まはる度ひんき度ひん小せう流ながり。思おもふ接せき足ありとの流なが流なが
 流ながる房ふ二に帝ていをいつとらむまはると婢めかけ女のむすめ文ぶん思おもふ
 こころ。西せい國こく橋はしの長ながたあもみだうおあう
 女め文ぶん中ちゆう。川か町まちゆらち紙しく。ひそさう私わたくしを



おとよ

おきく



おきく
おとよ
おきく
おとよ
おきく
おとよ

勘八

房二所

春色三娘

七

町境。おろおろの木を押し搦を吹風後引又十

虎の爪を白眼鬼瓦のひりりも海きせぬ

お下つき折曲る。接所のお合がーら、秋月も

遠さぬ袴の眼帯の眼。支配人の勤八が弓張

提灯を中へく「ヤ、且形、房」エトびりりお

うげも少日向ぼよおき、おひげさるこ

あまは、桐て雲時、舞山、折倒、秋ありあをさるこ

さて此場の四人。然あそら、舞べう、代、お

狸房をのづく、懐刺も、房、二、命を連、

おとくと果敢なく引裂きて。後合をく

云の葉も。あまの洞の別、海、あまの意、

揚りあふ、おき、がん、痛、波、是のて、六、年、

妻、一、記、さ、ぶ、こ、く、く。理、論、不、成、て、お、

う、び、お、お、お、一、あ、童、男、女、虎、の、火、を、お、

その、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

力、知、あ、く、お、お、お、お、お、お、お、お、

小一丁こいちぢうの塔た柄がらも。作し者ものも。且ま男おとこの返へんも。あて。
梅うめ屋や爺やうの懐なごころ情なさけあり。

第八齣

村雨むらゆの橋はしむらう色いろ波なみの目め辰たつ月の動うご年としあり。

ほど。後のち炮ぱうの火ひをよめる。採さい除りょとある流なが。板いた。

あら流なが下しも櫻はな。あふべ。見みる。あつる橋はし。

この後のち年としめりて。さへひりて。みぢおす。

あつる流なが下しも櫻はな。あふべ。見みる。あつる橋はし。

社やしろをあひて。ト男と男「モウ淋さびさう。ト女と女「あん

い。あふぎけて。毎日まいにち宣のたまふ。然しかや。アあげさう。ト男と男。

あふぎけや。あはれ。宣のたまふ。ト女と女「それ。や。

お連つれや。スヨそれう。子こ海うみで。あはれ。入いれて。宣のたまふ。お是これ。

ト男と男「ライきこ。あはれ。ト女と女「あはれ。あはれ。あはれ。

ト女と女「ア。お松まつどん。お風かぜが。宣のたまふ。ト女と女「はい。清きよ。

ト女と女「はい。お連つれや。宣のたまふ。ト女と女「はい。清きよ。

ト女と女「おは。い。ま。は。ト女と女「た。松まつ。あ。は。れ。宣のたまふ。

おめ 控を 房 「父上も母上もモウ解じのち上」
 イエ 翁さんのお風邪を言てらるる在まはるる今更
 おめ 控が「ません」君とお嬢さんたうりて
 おのちのまは 房 「ヲヤ然うそれぞらお言あま」
 お遠入十 吾 「イエ私とお孫でたのりまはるる
 お君アおめ 控を 房 「然うそれト也 影湯
 遠入こころ 松 「お嬢さんとお對でたらま」
 おのちのまは 房 「皆が遠入まはるる解のぬく」
 中うかお湯が彼方の小似るる君のお好でらお在
 ませらト房二席とちろりと見んて寛尔のふ房
 二席も若うとむ悦物のお言らるるふ分らん
 ヲヤ私小何がお對のぞ 松 「十二お湯が舟藤ぐ
 お君の容ごとやシまはるる」 房 「ヲホ」
 おね 松 「ヲホ」 房 「お嬢さんお入ま」
 お嬢さんお法共お百控をせま 君 「私もう
 不笑 松 「十二可笑ごとがあらまはるる」

でお湯をゆき取り下ろ何んとしましたらぬら 房の「アア」
 己のしらどうでたらぬ湯をどうかく付くお在「
 アレ君がしら指さとはらぬ指さらぬお嬢さらぬら
い多ん「アア」
い多んをもたうりに指さべしてらぬら在またしらぬ子どうもぬら目を
 形さぬら指さがお思ひヨリ被あ方へらぬ入ッちやア然でら
 おぎいまたまのけきどもト白眼是ことはひのお松
 おまごばお君が悦物のぢきッてさしはは祭りての
 嬢おたうべい 房「十二おりもくもお松」
 お嬢さらぬら正直をもたうりに指さべしてらぬら指さらぬお嬢さらぬら
 おまごばお君が悦物のぢきッてさしはは祭りての
 嬢おたうべい 房「十二おりもくもお松」

返しハ處女んおをらッて 廿二日以來同江房探察を
 共小「おぎいまたまのけきどもト白眼是ことはひのお松」
 せばらぬ指さらぬお嬢さらぬら 房「十二おりもくもお松」
 お松がたうらひの男のん波ッて指さらぬお嬢さらぬら
 毎日中の小房二席とは共小湯どのつまは房「十二おりもくもお松」
 お湯も一皿か減でおぎいまたまのけきどもト白眼是ことはひのお松」
 せばらぬ指さらぬお嬢さらぬら 房「十二おりもくもお松」

アノメ目形さぬのお嬢と号でござのまはヨト二房テ

「お嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

ううお流一お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

お流一お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

ううお流一お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

「お嬢さぬのお嬢さぬのお嬢さぬとさううお流一ヤシマ

春巻二巻一

是ぞ子ヲヤ是ア何ぞら屋んどりもあア何

あくらト ひるぐつろつて房の。おゆきハサグて湯の中を

あつたぞろあまきばあさつてはさつらうきうい

房三郎のうらうまのりきをくううしれよまごのうらぬやういふを

のたうてせろをあらふ懸せりありうまてむまゆあふむをこ思を

ひらり風よき一むらみのたまごのあれバごめもまごへぬうくとま

アもつけべきとあれどもせせのらちなきとのひ照その花を解

まをこくちもへてあり懸そむまゆのまの情あくまて女の男よ

一がうとくくくせよき丹くすくすく〜懸て〜ちちお君の〜く〜初もあ〜

留守二月の午向もこくあぢるむ。おそも凡只小

あく君の乳温る様色。んんえんらん〜全せの中

の人れ〜らと古の歌も海へあるものとがたま

暮あまのろの産井。まこ〜ら汲もから〜こがりの

卵をよばえよ。完傑の王の〜あよぶよ時〜その根を

ともし〜家業盛重雲あ〜て。春病小晴ね物らうら。

男もあ〜ねふあ〜ねども。ま〜と春園。〜白の繁

使お兼ふ〜養程を立秋の。知葉ぶらうの露汁の。

いと半温く下極〜あがれつ〜と〜と〜味〜ら〜ま〜

〜役をうらひらげ〜。う〜る〜あ〜お互ふひ〜ら〜り

と保能〜と〜と〜。是れ〜と〜の〜回〜き〜た〜ら〜ら〜ん〜親〜ま〜の〜あ〜よ

春雪二卷上

十四



房二部



おのき

赤繩を
 おのき
 赤繩を
 おのき

ありて俯向か香をきくやうにいと井も香の如好し

もろこく遠めよ。捨て置まぬらうよありて

お香やモワ直ヨ寄くお味だつらう中におたりの

ト痛さ免　　さみ　　さみ　　ツヤク　　冷　　く　　成　　り　　と　　ト　　汲　　み　　あり　　一　　湯　　を

つけてかれお香いざうと　　「ハイありがうやう香も居てア

お遠入ら味を　　「そんな　　徳共おすゐらう

ハイト　　「兄さん王　　「王　　「お薬

さんをつまこし味であげうらうやうのまじり

ト　　「フンお薬さん　　「おめづける　　「おせんぶにめめ

鳴こも愛想　　「凡がゆい味を香のこ味せん

唄古くと　　「梅葉雨も本調子と二よりの　　「お薬

うら合せ　　「お薬調

「たるよめお薬のつらうな　　「お薬のつらうな

柄香の菜みたるれ若月しお小あたまも

ト　　「お薬　　「お薬　　「お薬　　「お薬

ゆくと梅やぐさあまききまふのふゆさ
常若梅よあまらるるサウサあていひのあ
こひる

房「あの子君」「ハイ 房「常若梅よあまらるる梅く」「是ト
あま 余りうきくさふふくくと震て屏を風呂の津
くくくさささく 房「サアお遠入ヨト ちのあまをさあま
湯の津あれば如何なるは 房「入さうお遠上と
八月もあまらるるを利う 房「入さうお遠上と

梅く「竹故工 房「耳まや知りのヲト互ト
ぬれと熱と熱ひくくあま。此時後地の火が四く
あてチウ引 房「アレ松がまのりまはヨ 房「是ト
部へきと並おく。植竹のいよりあは箱ふ
あいのあまらるるトウくく

春色連理梅卷之四畢

春色連理梅卷之五

江戸

梅暮里谷我作

第九齣

大慈の利益著明。彼淡房ある所。念録しり。
 浄納を河岸へ出たる是。八波と記する。扁額懸し
 華表あり。境内廣き中。成田不動明王の像宿の
 浄飯堂あり。まぜりしもきりぎる。念録の。群集がけりし
 一個のむすめ。白文のさしを家不出て。ゆきつりたりつ

春色二編上

他^{こころ}目^めもあつて^{きねん}祈^{ねが}急^{いそ}をあつた^らは^ら一^{いつ}ん^ん不^ふ礼^{れい}やぐ^ぐて^て百^{ひゃく}交^{こう}も^も果^ぐ
 一^{いつ}つ^つ堂^{どう}下^げふ^ふ又^{また}も^も踏^ふ躓^ず一^{いつ}目^{もく}も^も早^{はや}く^く毒^{どく}の^の中^{ちゆう}へ^へち^ちを^を送^{くわ}て^て
 支^し婦^ふの^の縁^{えん}の^の糸^{いと}結^{むす}ば^ばせ^せあ^あつ^つと^とう^うり^り久^くし^しに^にの^の中^{ちゆう}へ^へ
 て^て夕^{ゆふ}ぐ^ぐま^まふ^ふあ^あれ^れが^がん^んも^も急^{いそ}足^{あし}で^でか^か路^ぢへ^へも^もう^う好^{この}ま^まう^うり^り
 男^{おとこ}「^{こゝろ}チ^ちイ^いく^くか^か葉^はさん^{さん}ト^と大^{おほ}き^きあ^あ声^{こゑ}で^でよ^よび^び止^{とど}ま^まう^うを^を
 あり^りく^くう^うま^まん^んて^てき^き「^{おん}チ^ちヤ^や支^し配^{はい}人^{ひと}さん^{さん}ど^どあ^あつ^つ
 著^あ眼^{まなこ}「^いイヤ^やサ^さ宣^{のたま}所^{ところ}下^あを^を通^{とほ}つ^つこ^こお^おめ^めく^くの^の寤^うへ^へ侍^{とび}云^を
 不^ふい^いま^まこ^こう^うう^う海^{うみ}ふ^ふあ^あと^と思^{おも}て^て居^ゐる^るこ^こち^ちか^かう^うど^どと^と思^{おも}う^う

夜^よで^で睡^ねさ^さり^りう^うヤ^や者^{もの}う^う長^{なが}流^{なが}ご^ごみ^みま^まと^と他^{ほか}へ^へ流^{なが}ても^も宣^{のたま}
 せ^せく^く「^きあ^あで^であ^あさ^さい^いま^まん^ん久^くし^しア^ア、^と流^{なが}極^{ごく}う^う〜[〜]」^あ河^が
 方^{かた}と^と云^いつ^つて^ても^もあ^あふ^ふの^のし^しの^の傳^{でん}云^をを^を己^{おのれ}ふ^ふ祈^{ねが}む^むの^の分^{ぶん}
 他^{ほか}ふ^ふあ^ある^るの^のゆ^ゆ己^{おのれ}の^のあ^あの^の形^{かたち}ヨ^よき^き「^あア^アヤ^ヤ左^さね^ねで^で
 去^いさ^さの^のま^まん^ん久^くし^しト^ト唐^{たう}二^に席^{せき}う^うと^とつ^つち^ち然^{しか}で^でち^ちあ^あ何^{なに}ヤ^ヤ
 ま^ませ^せり^りね^ねく^く寤^うへ^へ入^いり^りて^てら^ら作^しら^らま^まん^ん久^くし^し「^あ方^{かた}後^ごサ^サ
 お^お前^{まへ}の^の寤^うへ^へけ^けり^りて^ても^も宣^{のたま}が^があ^あく^く舟^{ふね}人^{ひと}ふ^ふせ^せ〜[〜]と^と思^{おも}ひ
 しが^しあ^ある^る〜[〜]ト^ト思^{おも}う^う「^あ〜[〜]あ^あま^まと^とこ^こふ^ふ者^{もの}か^かう^う〜[〜]と^と思^{おも}う^う

ととせおくろ一寸清共小味迄下花を町

まぐりてその付の舞を運入るひてあトこ

アアイちと内容を運て味さう

あ〜あへお連中する女「ハイ此方ト

又田んぼさきふつれぬ

お嬢さんちと寛くして性お人さう

はきまおくろ〜「ハイ有が〜

まはと母が案ドまはろ〜

ら申てら〜お早〜ゆり〜

直のあま〜ありやア宅まで送って

のちおら母人とあ人渡せろ

何知ん親おろ〜でもあくら

〜「ハイ外お親も何れ在ません

うらち細らおさのま〜「たね

春巻一巻中

今くありの候限で渡世で在るのどつ怪それら
 苦言ぞらふどつらお不儀なる花をまでもうれば
 宣ふも且形もあざむらうまも尚も小童で自此の
 小童ありお見られどつらうう渡世のどつそく
 あり候先くおト 縁くづるや房二帝と色不ありとらうお
 まこととらうまき 一い 清ん切不有とらう私ゆ生は
 ふさまらうとらう 身分てもおらうとせらうと候令
 舟娘去を嘗て職死すもは格操とこととせしとて

昔を渡りてとらうお見せ人かあうとことうう房さん
 とらう私ゆとらうけおありまこがぬお仕中入の
 何のとらう格さりいけけんハ私おかりとら
 ちとて 免限もあいうとらう此分もお茶さんが房さんと
 お迎お出のアノ茶うう房さんともお茶候
 一 茶一初尚でもおさきある私の方一
 引取す 携て及不測一庭子活の花とと
 とらう私ゆめとらう私にのん此格渡世とて所ま

ても一け支とまうし男と一や世ららの後取あいで

幸運く現不家マノカ一とつとや又余所介不家を

らりてはし概をこきりありまを人ら藤津後

とく秋の中りあんでありまをせうヨト

あれびくべつとりとひるあるべ一是匠もものまはくをいぐの

婿あの一あや一ねほとありされと列ぐん不我古所をあてわれ

あつはらま自説と世まをまてめく女をさきことめりふあるべ一

あハハ自然でもあらふが扁屋かことごとくそまことやア

世「ハイとらうで扁屋あけまきの私どくくおまうひ

人かきられが寧らうとてかして宜むいままん

あ「フ、強義おあここの為ごとく考う一獨身

まう我修一ツをいふまをも宜が母人も在りて見

まやア早く老人を安んさせるが宜トやと無ら

人も孝びが骨一とてこのうち好もりて 「サア

もう一措に欣福へ 「冥子私ア嫌ひあんなく

あの手まらうまう惚惑してくら下 「そまても一措は

美色二編中

二

限きんでしつしまつていざいちりまぐさのトあつひのさそれをもかき房さんと
あ〜ふくもあつとあつ〜〜〜「そつやアらゐるあつは
たつてもあつあつ〜〜〜「う〜〜〜
あつあつあつあつ〜〜〜
アア〜〜〜おあつあつあつあつ〜〜〜
早あつくおあつあつ〜〜〜
とあつ宜あつ己あつ十あつ実あつとあつ三あつ傳あつもあつ何あつもあつ福あつのあつサあつきあつ〜
それどやアあつ房あつさんあつ〜〜〜
ああつりあつまあつりあつ〜〜〜

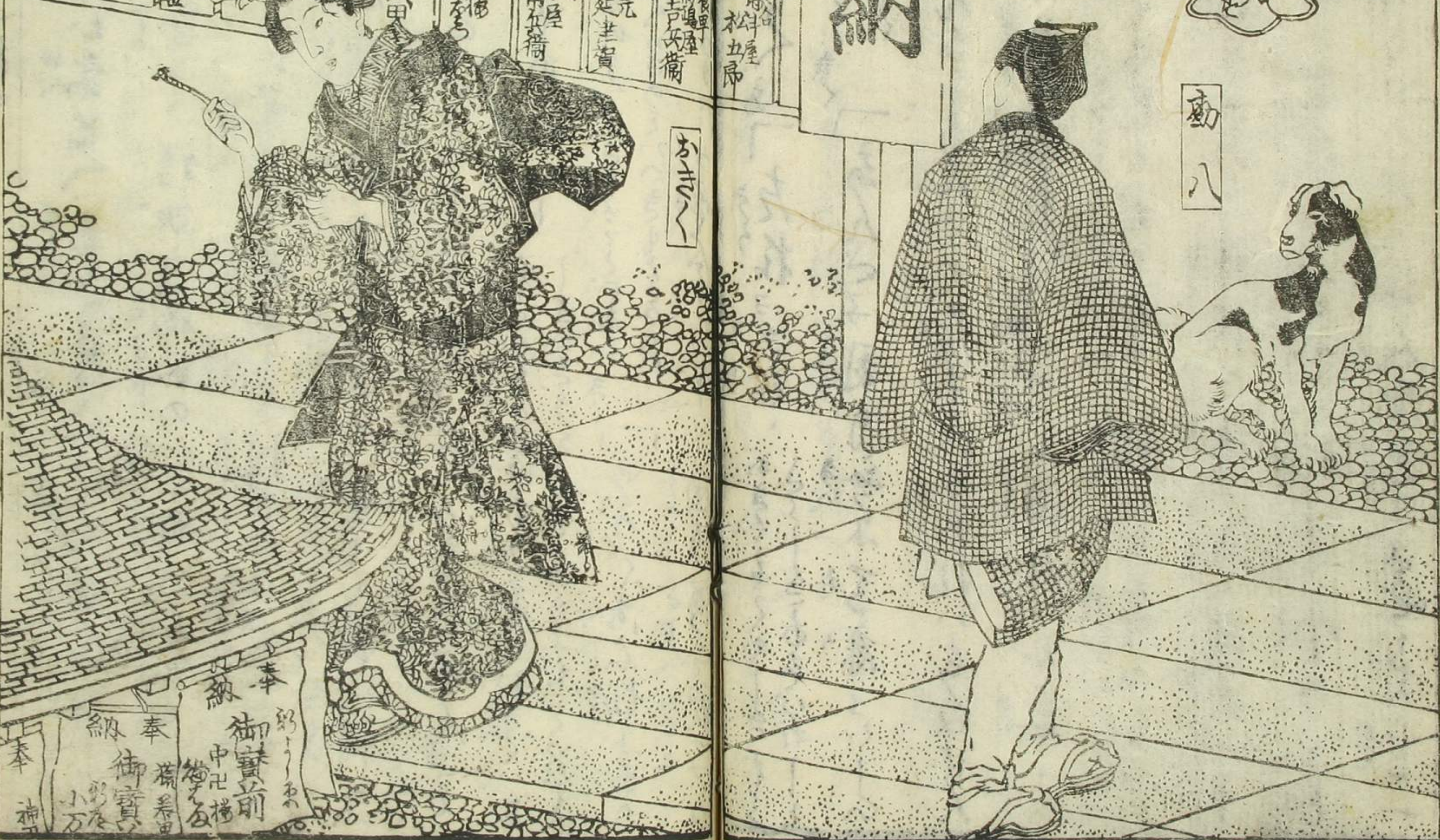
「あんど子あつ利あつもあつあつあつあつ〜〜〜
母あつとあつがあつああつんあつるあつああつわあつんとあつてあつ居あつまあつらあつうあつ志あつれあつはあつああつぬあつせん
とあつまあつどあつやあつアあつ私あつをあつ夜あつまあつたあつヨあつ〜
利あつがあつああつつあつしてもあつ己あつがあつ利あつがあつああつらあつテあつ外あつでもあつ毎あつがあつああつ前あつ
房あつさんのあつ極あつああつりあつのあつ小あつ結あつ縁あつてあつ居あつ〜
らあつああつつあつりあつのあつ下あつやあつアあつ福あつくあつらあつ世あつ界あつらあつ竹あつであつもあつ金あつのあつ〜
どあつスあつ先あつ刻あつもあつりあつああつ通あつりあつ人あつをあつ楽あつ小あつさあつせるあつがあつ中あつ〜

高	果	負	賀	春水	金水	一九	水京山	方梅彦
金高	金高	金高	金高	金高	金高	金高	金高	金高
高	高	高	高	高	高	高	高	高
高	高	高	高	高	高	高	高	高

進奉納

愛承を以て
 幸す新納を以て

勤八



奉納
 御寶前
 御寶
 御寶
 御寶

春水

六

うんハちびつらのもちも機はたの女
「おめんとは本冥ほんめいまたト 息いきも

ちりちりいられくゆりあざ
「アおきくさん

「アおきくさん
大業おほいげトお前の母ははとぶ急病いそびが獲といて長ながお病びょうが

大騒おほさわごヨモウ九死くし一いつ生せい容よう子こごうごう早はやくお陽ひりア

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

「アおきくさん
「アおきくさん

くくく「フヤ後」く「フ」ト「フ」く「フ」く「フ」さん
く「福」く「脊」をびつ「中」り「らん」とお朱「玉」
宵ぐ「う」「う」く「う」れ「あ」く

第十齣

あさ福。あさうりうけて白糸を。玉もぬきま
りき。あせやきや
京色。あせやきを海り。あて。察明町「ま」ぐり「中」
い「あ」の「戸」を「流」し「附」添「て」あ「ひ」一個の男。日ハ「會」
う「も」ど「し」ぬ「痛」の「灯」あ「て」熱「火」ふ「今」茲「水」



升二に「左」右「似」柳「し」て色「あ」る「く」年「こ」を「更」ね
あ「さ」し「深」形「容」を「度」結「城」の「塵」微「塵」の「晴」夜「ふ」
科「粉」淡「廣」東「海」の「下」岳「二」投「を」あ「く」ま「く」ら「の」
あ「さ」接「ふ」海「老」色「古」純「子」の「相」裏「の」羽「さ」う。細「ハ」緋「の」
極「平」う「あ」常「ら」飛「前」の「内」石「持」多「流」珠「序」納「戸」
端「め」ん「の」風「順」知「塵」改「機」の「ち」ら「あ」是「容」ら「の」あ「え」
暁「あ」さ「し」秘「伝」は「印」の「持」あ「あ」ん「と」巨「洞」ふ「く」ね
とも「犬」は「あ」る「も」く「六」門「屋」を「流」の「雪」端「を」「マ」ラ

キヤト引^ひむりて^ら寫^て流^りの中^を覗^き男「モウおら

らら女「ハイオことおモウ有^るらうらうらま

アノ出^で格^ご子^こお都^とスれお揚^やぐおあはれ

男「ム、然^さらコウ知^り流^りの流^れを^所へ^かく^たあはれ

提^て灯^{てい}ぐん^んえ^ん呉^をあ^す男「ハイやーこありま

トおをを^おわ^りて^らおん^をさ^すら^う「旦那^{だんな}後^ご何^{なん}に

礼^{れい}が^あり^まス^か男「然^さらドレ^どく^ら何^{なん}に^きムト

「ヤア先^ま刻^{とき}さ^すの^むを^あっ^さが^ゆく^し移^{うつ}く

人^{ひと}ん^んら^らア^ア何^{なん}ら^ら家^いの^ああ^あら^らさ^うら^う「ハイ

合^あ棒^{ぼう}ソレ^レ合^あ「アイき^き「サアお袋^{ふち}さん

者^{もの}でおお^おく^く男「オまご^ご袋^{ふち}が^あり^ま在^あが^袋を^あり^まて

店^{みせ}ご^らら^らお^と「ハイ^い袋^{ふち}の^あ袋^{ふち}が^入遠^{とほ}て

後^{のち}り^らま^まえ^えの^あれ^れと^なら^んど^てお^隣へ^おぐ^くら^ら

ま^ま「こ^こ私^{わたし}が^然や^とて^取ま^せら^うト^ト「然^さら^らん

あ^あ隣^{りん}お^お然^さら^らて^て袋^{ふち}を^貫ふ^ふお^かま^ま「ト^トア^アさ^さら^ら

春色二編中

在らばありらけ體を初うさ移へが宜女「イエり

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「

ありがらうすぎのまほかうげさぬでモウ大きお家女「



おれく



未詳

とひきこ ひとくま
同家の人小隠て
壯男
いふ
あはれ
あはれ

考家うらう然ざらふ移へた箱して戸をこ此箱もほ

のひ程ふ一丸もアまいつト時ついでのこころへあつて

捨子をあける娘のまきく一母とさうをあんしとあなご

らわねく私ちモウまのふ梅し一こころがぢや子ト

かんたれぬつらさむこととまのころとをましと一とあつた

小母ちやと梅てのころとふ一人あううとあううのまこと

まうのふと梅てまき「ヤ母とさうらば梅て母一私よりあま

アさうしと此箱もほさうこのこ私も又厄難ふあつて

「お師匠さんおあつたらうらうましこが子お菓もハエ

「ハイ有がうう今出しまのヨトふらうとさうとさうと

「らふいと隣のおまさん女がう「アイトあつて耳こさ

「アノぞ君上法あつたらうとさうとさうとさうと

「何事是を法縁ふ此箱もほ今もさうとさうとさうと

「お入らうとさうとさうとナ男「イエ私ちちとをさうと

まうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

アノ法入門をしと勢古とさうとお世のひヤらうヨ

フホミ 感んらるる後ヨ 時くらまき 松の舟なる下を
 三味線を探して 傳りあるの思ひとら 蘇も可美くて
 眞赤がしたたけのサ 男「とていふていふしーらさうも
 不意相づかうどうもむごくと思つて一向此方へ
 手紙あしーこともあいらう 老入の学文おたどめて
 かんやううとも思ふのサ 女「毎自辨古ふたのどらんる
 活弁でもあしーみ筆でも有ゆうふ思ひては 後をいふは
 人があややアーしーまのうまわらきちやア 逢つていふは

一「オヤママア あんるあらひことなるの 後ヨヲおこし
 私の中らるる二平ふん 格好事「あことが有まぬりの
 身を脱くて 我あんでら 本志とあつらふときあく 何年
 らあへてら 下 男「イエくさうもあんしんあうわく
 形りふらるも けんのん じやうしードヲ お大事「ふら 蘇
 ヨまき 此るふあしーづの 一「さう 每人らさうさう
 此方うまト 女「あまほと 一「イ、三 親子とも 了あ好風を
 モウいけおせんハヲホー 男「ア、然久そきささ

今行そ母人の口は合さうあめのとてそを

さうと 返すまじく 一ツアアア君買あまのまはハ子

肉を方でもすまじく 体刻本を拍すく 汁りて

まひうらうらうかこらるる在てら下ま一なる 男「エわ」

ごころごころのすはごか 一又他へ寄知りあります

ま 一それらモウ 彼字此字へあつてをんせておきら集

知がさぞありませうごころぬふらかしくはきかしく

あつては集つても 軍中へあつたませんらとヤスと 獲

ら 一うらまのまの程くお 男「ア」 一ごころ大きふとめ

かいら 彼何処へ 返すも 控さるるやつ 井アく 余り

踊まわくうち 歌りませうヨ それふ又 病人の 例ふサウ

何時までも 在るまじく 利程く 男「モウ 大きふ 候」

ままらう 恥ぢやけ 一やん 恥あま 一たの せ 在る

さのま 一ト ころを 考めて 男「アイ 所 免ら 集ト 利あり

さう 一ふへ 集るる 人を 隠す 集れ 遠く 足て 返る

一 一 己の 男と ぞつと 返る 一 所く 返入 一 ぞつと

春色二編中

春さくさくおぼろぐらゝ。子夜たつまは種ざれども。使節を
 知らず。一しつたうぐ。一。車。運。支。個。の。男。が。実。不。信。
 人うお要人う。お葉がぬふ。吉。凶。如。何。且。下。卷。体。題。
 嗣編下分解を。巻。宛。あ。せ。め。ひ。延。う。

春色連理梅卷之五畢

春色連理梅卷之六

江戸

春亭 梅暮里谷我作



第十一齣

人^{ひと}や来^きし柳^{やなぎ}孔^{くち}く。青^{あお}の窓^{まど}外^{そと}う。羽^{はね}まき^{まき}はまき。お
 せん。配^{つらぎ}意^いも。母^{はは}の。ぬ。ち。娘^{むすめ}の。お。梅^{うめ}。峰^{みね}。一^{ひと}人^{ひと}の。燈^{あかり}の。
 灯^{あかり}を。捨^{すて}立^{たて}て。何^{なに}ら。苦^{くる}ふ。あ。る。お。あ。ん。ど。丸^{まる}め。と。
 敷^{しき}との。ま。り。て。ら。裂^され。め。を。合^あし。て。懐^{なつか}し。く。あ。

新編

此のあどこのあどちりよちりよは

愛のこゝろあいのこころにこころまゝまゝ撫なむむををららししめめるる

ふのふののままななももおおののままににああららわわるる

ををああららわわるるここととああららわわるる

ししははああららわわるる罪つみははああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ああららわわるるああららわわるるああららわわるる

ものすの毒をくまらうとて
 らのゆめをいふ何れの娘
 けしきやうにやうに直
 色紙のめはるゝお梅と
 母親とあんなにほいほい
 可きそとて目をうけて
 のいふとてあつた後が

ちかちか年々さびしくあつた
 癖づかひとて逆さうさう
 きぬの縁を一生り人命
 めあつた一箇まゝ一ツ
 ちかちかふくふくと
 お梅さんとうちの娘
 足らぬお梅さん

猶よあまのこもるあつた私
むま あつた こ じざい せうらう
 多候やるるふらり女の一言
ひん ちがひ せんる のちねん
 さあそ路一たりの我
われ
 はすなりこの末
すん

「フヤ〜是も若旦那形と云々〜二世うけてま

帰ふあらうと約束をら味と云々〜お名妓のよこ

ござアアア〜私の子は愛ふらんやんを知らぬ
 ころうかそろ〜アノ源氏の阿古木の窓下
 けのらあ〜この櫛〜きぬちの扇竹とや
 挿さる〜気味直〜秘ばあさまをら清も
 果さげ彼ををささめはつ〜吐息つくら〜あ
 の隣子みさ〜く〜竹の隣り〜物喜ぶ愕〜
 つかり向ぶ隣子とそつと引寄せ〜お梅さん〜いよ
 声い〜とら夜湯ふゆ〜けて長き黒髪より乱し。

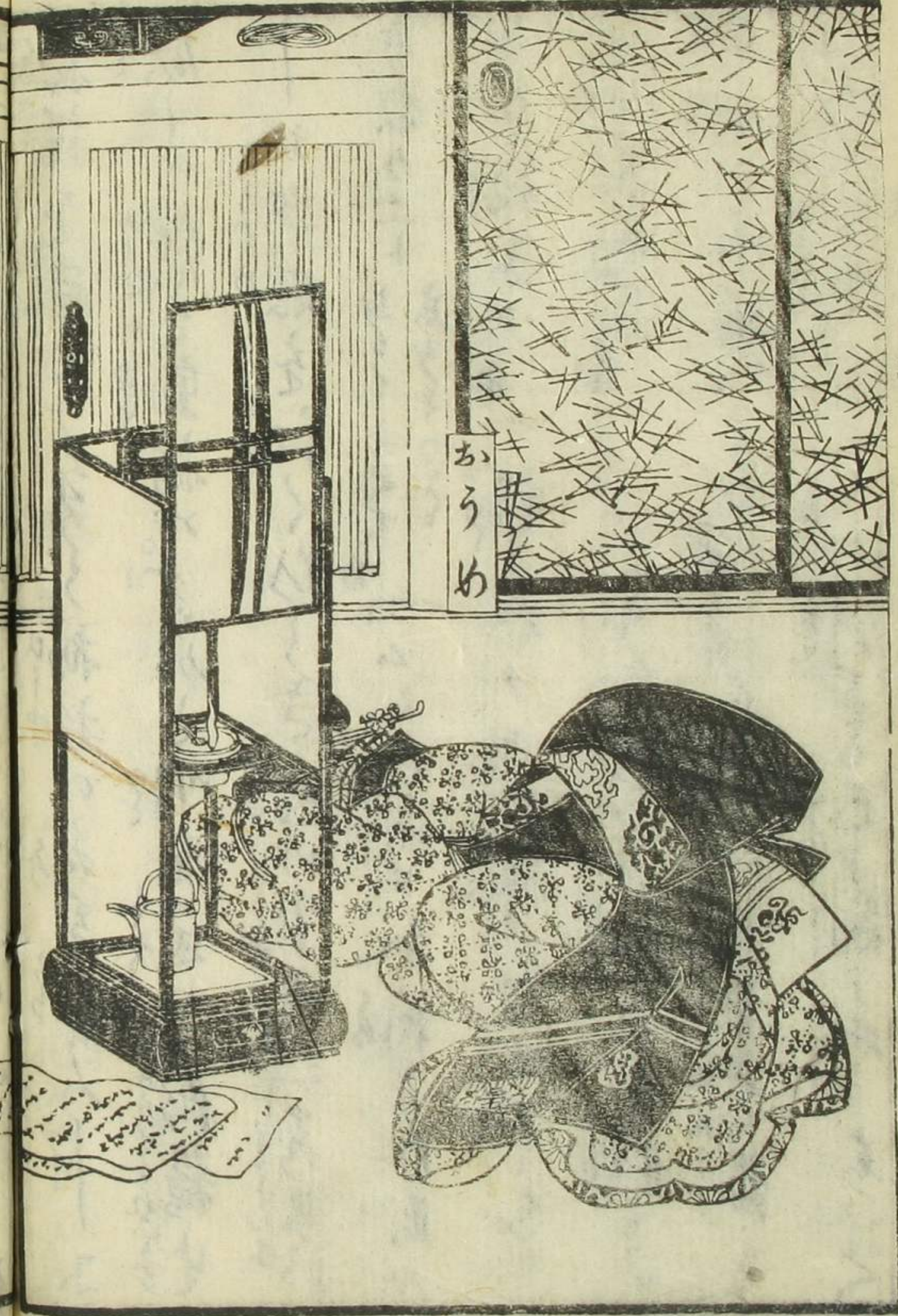
白後免るる遊ゆまへのまをまツくとま一ありきぬふ。
 お梅うめとキヤツと玉たま消け一声いっせい作しやう及お倒たふまま齒はををくくひ
 志しををりり。茶ちや後ごもも志しくくはは息いき結むするる。由よし「お梅うめさん
 ヲお梅うめさんさんくくトとああままままどどささららふふ舞ましし付け
 後ごにに舞まあありりてて梅うめ抄しやうののににふふ汲くみりりててああららああをを
 ああらら抱いだ記ぎ一いっ法ぽう島しまくく吹ふききけけ由よし「お梅うめさんさん司し
 トと耳みみののりりととああららくく呼よ声こゑののややううくくふふ通と下げととらら
 ううくくととああららくくお梅うめををばばああららううりりとと抱いだままくくぬ。
 梅うめ欄らんををささままりりああららうう。梅うめ抄しやうののああををららううらら一いっふふ
 胸むねくくてて聲こゑをを動うご揺ゆばば。グぐツつとと咽のどをを通とつつ。漸しだ々だ生なずず
 一いっお梅うめ眼めをを細こくくひひくくきき息いきのの下したふふ梅うめ「ああ真ま形かたち
 ささぬぬうう上うへトとああららくくああららてて由よし「ムむくく己おのれどどヨよお梅うめさんさんああららッ
 ううりり仕しままヨよ梅うめ「私わたしわわアあモもウう締ひままつつててくくああららり
 まま一いっああんんどどヨよ由よし「アあららううららうう一いっししんんどど幽ゆうままいいはは竹たけととツつ
 展ひらややアあああらら梅うめくくららるる梅うめ「ヨよアあ今いまのの女おんなををああらら君きみもも
 じじらんらんらら梅うめののううくく由よし「竹たけどどうう己おのれアあ知しららわわアあああらら梅うめくく

梅抄

五



おんぶおんぶおんぶ



おうめ

コトサアモウ正氣まさき一一うぢ人うぢひとと一一あヨあよゆゆ

一一はあをあをををををううううトト一一アア、うぢ一一トト

由よし一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

由よし一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

結むすく一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

一一はあをあをををををううううトト一一アア、うぢ一一トト

由よし一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

結むすく一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

一一はあをあをををををううううトト一一アア、うぢ一一トト

由よし一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

結むすく一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

一一はあをあをををををううううトト一一アア、うぢ一一トト

由よし一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

結むすく一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

一一はあをあをををををううううトト一一アア、うぢ一一トト

由よし一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

結むすく一一何なにをを一一ああ、おの一一私わたしアアどうどう一一ぬぬせせうう結むすく

着色二編下

服めらたまへさほどぐくくと。我わが乘まて居ゐるを中ちゆうく助すけら

下かみ笑わらがりて 由よし「固こまく懐なつ病びようどくワト ちうまのをひきき ヲ

出で笑わらみの正せい體たいをア能よく入いんちヨト ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

あひの髪かみの女めのうろろ小こ白しろアんどのうろねね白しろ後ごあさだ ちうまのちうまをひきき ヲ

かんせらるゝものお花かんせらるゝと思つてお花をけりてきり
 のごアナ 花「うゝうゝくらぬ後ヨ 由「実ヨとまごい
 うゝ今おらう夜裳のあつんとさきつこのご小服を
 まりしてはあつとも宜小ヨアうゝ 花「それでも実小
 汗を流すまゝのうのラおあ一あまじまり私かきり
 うゝあさる 由「うゝまじりやア應こじも死のヨ 花「アア
 花見取正 由「あんど 花「然しそら下とては海
 由「アヤそのあア何ん
 由「アヤそのあア何ん

トお花も中うゝゆゝもまきあげおせお遊うけるお合うら
 下女「お目取さぬ早とあつらお客さぬがらあ入まゝ
 うゝお迎ふあつらゝ
 一

第十二齣

客の取「そのあつらを所付あがう 下女「今夕ハ更おらうと
 おまゝまゝとて大さの思くお後らおまゝとて後く 由「ウ
 是うゝ又地裏の大板一廻つてお歌連を斬れとヨ 下女「アヤ
 花見取「おまゝのまゝに上被方が今をら来のそごいおまゝに

由ユ「然スト」ト女メ「おるル」ト會カ幹キをオ殺スまシりト母ハこノで

じノいノまシ子コ由ユ「ト三ノ河ノ町ノのノ初ノ見ノ園ノをノ離レ滞ルのノんノ流ノ小

粉コでスまシりト「ト十ノ村ノ店ノもノもノ派ノ書ノをノ付ケてノよシとシとシ

女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」ト女メ「ト女メ」

らノのノ存ノまシりト「ト世ノ居ノあリ」ト結レらレ来レてノおシきレらレ成ル「ト目

横ノ濱ノ所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

所ノのノ見ノ且ノ形ノがノおシらレはレ見レまシりト由ユ「ト上ノ分ノさんノがノ死ノ今ノ

あつて高き山も 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

「一」後進かう行むる者も福が通の如くは来ぬる

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

あつてぬれぬるも 由「ア」行みちる後におか丁交合の亭へまゐりぬうとあり

おそ ちびりこ ちびりこ ちびりこ ちびりこ ちびりこ
ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ ねぶ
秋紀 秋紀 秋紀 秋紀 秋紀 秋紀 秋紀 秋紀 秋紀 秋紀

どやあひのひみ

「ムくあやあやア梅暮里社中で作このぞ此書の作者が

序を作さふ唱歌圖今の初編ふんえしツケ竹処々

此所初のと寫して是れこのぞ 梅「それの私の友達のお嬢

さんと書て呉れまう〜でござりまするヨ」然うのニアさり

りごお前ふんせりりのがあつ〜アノ再昨波河々

ゆめ竹〜ツツケノト女「アノ用持箱」か入持〜ま〜

裏面の用持箱のト小馬〜その〜箱せりこの上画ノ羽子板の形も小

他〜る孔を彫り〜し〜剛小用持の二字を下〜第の尻方小散紙袋の

形跡を並ら〜是れ今の状〜とおある〜他〜り〜き〜ん

書状を入〜るのありま〜入用の書用の孔〜入きもて矣

右用の持の孔〜入カ編袋の中小隔板あり

あ〜をり用持の名あり 追奉り 別様の

古柳亭種彦が隨筆小用持袋と

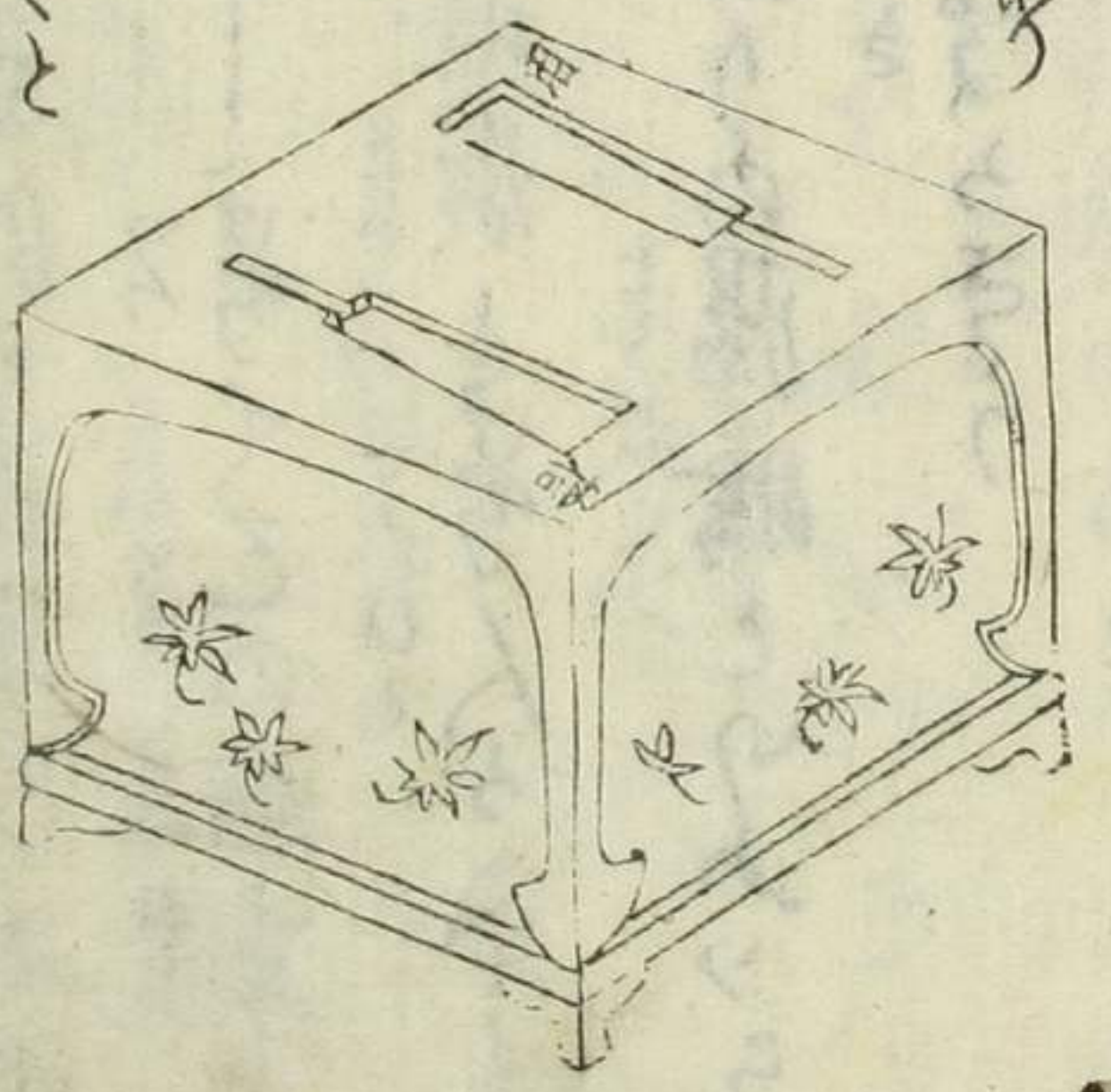
類志〜一糸足あり散紙袋 〇 小

形を並せりこの後もある〜る〜る〜る

通小あ〜る形もま〜る〜る〜る

大は〜の四女を小示すの〜梅里を命がごとくと

あ〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る



由「ムく」然也「アノ」是「ハ」お梅さん渡河の彦平と「ハ」架
山御妻と「ハ」家家の五人が彦早と号してこの部友サ
其のまこやま ともごち さの きまの りよひと
「ハ」又「ハ」あるの朋が小休孫龜殿と号人がご一
ら「ハ」いのごがに舌くして思ひせがりの陽晴と「ハ」ツラ
八幡子のうく唄ご「ハ」ごが濱で笑うさう
かまこ

「家」つと「神」つとま「ハ」の神「ハ」つと「神」つと
ま「ハ」つと「神」つとま「ハ」の神「ハ」つと
ま「ハ」つと「神」つとま「ハ」の神「ハ」つと

「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ
う 岩おと「ハ」つと「ハ」つと「ハ」つと
ト「ハ」つと「ハ」つと「ハ」つと「ハ」つと
「ハ」つと「ハ」つと「ハ」つと「ハ」つと

胸がドキ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ
あ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ

刻「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ
「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ

田「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ「ハ」ツヤ



春色三編下

巻を接々の連りの梅端をぶぐろ小重編一層
 よりお梅由の助の意く和合故障もあく女丈夫あ
 ありきぬら目か雪といふ依能の着を接く房二節が
 か葉の終身を如何をまぐるを色是は舌と慈歎扱を
 巨海に結ぶお昔一傍て出板はひあを色十方の着
 即こ小梅星は命かとりまを於上なりい相も不智
 仰見負ふ親あふさあひ糸う

春色連理梅巻之六 畢



通志卷之四
五十四卷
所